

みぶし地方史

「戦時回覧板」を読む

—地域史料から、戦争の歴史を学ぶ—(その1)

中畑 和彦

はじめに

第二次世界大戦、とりわけ日本については太平洋戦争あるいは、「十五年戦争」(一九三二年の満州事変から一九四五年の終戦までを指す)と表現された戦争の終結から、七十八年を経た今日、戦争体験を持った人々が亡くなられる中、日本人にとってその実相を理解することはますます困難になってきたと言えるだろう。

ある新聞社のホームページ(二〇二〇年八月一日)には、次のような文章が掲載されていた。

戦後七十五年。昭和から平成、令和と時代が移り、戦争体験者が急速に減っている。戦後生まれの人口が全体の八割を超え、戦争が「記憶」から「歴史」へと変わりつつあるなか、戦争の惨禍を次代に伝えていく取り組みが重要になっている。①

これを読んだ私も戦後生まれのひとりとして、記事の趣旨に共感するとともに、では自分としては何ができるのかと問いかけてみた。

(なお、本文に引用する文献等については、その箇所

第124号
2024. 8.1

三次地方史研究会発行

・「戦時回覧板」を読む
—地域史料から、戦争の歴史を学ぶ—
(その1) 中畑 和彦

・三次盆地の前方後円墳30
出水東第二号古墳—調査報告—
加藤 光臣

・「資料紹介」
「広島県満州開拓史」
—満州開拓と三次地方—
立畑 春夫

・大正八(一九一九)年の
三次地方を襲った強震について
上重 武和

・三次地方史研究会二〇二三(令和五)年度事業報告

に番号を付し、文末に【注】としてまとめ記載した。)

丁度そんな折、私と同じ三次市三良坂町内に住む方から、昭和二〇年四月〜二一年一二月まで(ただし、昭和二〇年六月から八月のものはない)の隣組(常会)

「回覧板」が自宅に遺されている事をお聞きし、早速拝見させていただくことになった。

それらは大小様々の紙片であり、全部で一四〇枚余りあった。今日では単なる紙片に過ぎないが、よく読むと戦争末期から戦後(敗戦後)の混乱期の様子を窺い知ることができ、貴重な史料である事が分かった。

当時、全国各地では都市を中心に毎日のように米軍による空襲に見舞われていたが、記録によると三良坂町には空襲の被害はなかった。そこでは日々、銃後の暮らしが営まれていたのである。

本稿では「回覧板」を紹介するとともに、それらを手掛かりに、三良坂町を初めとした当時の三次地方の

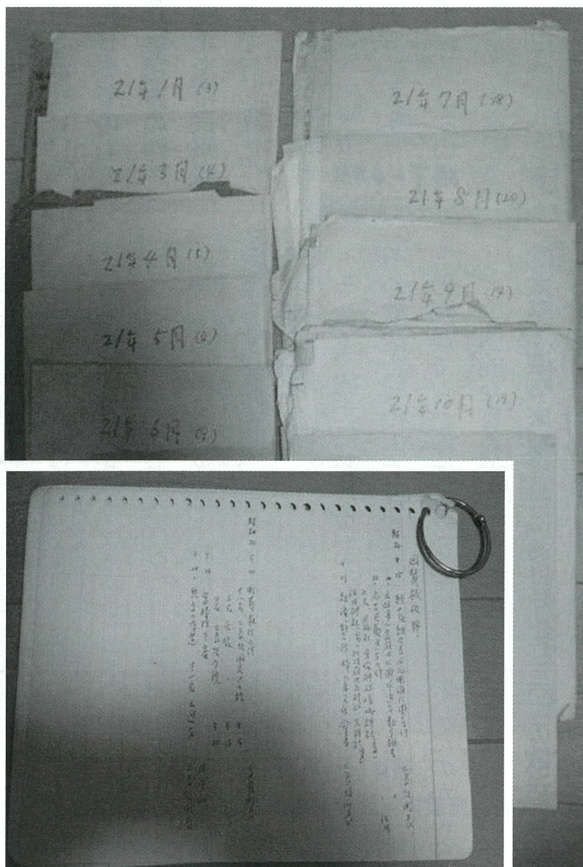
様子について他の資料も参考にしながら考えてみたい。

一、「回覧板」の概要について

①残されてきた経緯・初見の感想
「回覧板」を最初に保管されたのは、当時町内隣保班の班長をされていた田中覚郎氏だった。その後、高校教諭をされた長男亀太郎氏に引き継がれ、氏はそれらを整理し平和教育の資料として活用され、今日まで保管されてきたのである。

次にこれらの文書を最初に拝見した時の感想を少し述べてみたい。

まず驚いたのはその紙質の悪さである。戦争末期「欲しがりません 勝つまでは」という「戦時下・国策標



(※) 右の写真は、「戦時回覧板」の原本を亀太郎氏が整理し、現在まで残されてきた状態を撮影したものである。上は、原本を年・月ごとに葉半紙(㊟)を二つ折りにした中に挟んで整理したもの。下は、「回覧板抜粋」とあり、年・月・日ごとに文書のタイトルや内容(概略)を書き記し、それらをリングで留めたもの。